羽場久美子著『ヨーロッパの分断と統合
拡大 EU のナショナリズムと境界線——包摂か排除か』

(中央公論新社, 2016 年, 390 頁)

廣 瀬 陽 子
(慶應義塾大学教授)

**Haba, Kumiko, *Division and Integration of Europe: Nationalism and
Borders in the Enlarged EU, Inclusion or Exclusion?***

(Tokyo: Chuokoron-Shinsha, 2016)

HIROSE, Yoko
Professor, Keio University

は じ め に

近年、欧州をめぐる様々な問題が深刻な状況を生み出している。難民・移民問題による EU の不安定化、欧州に広がるポピュリズムの問題、英国の EU 離脱 (BRXIT) 問題、ハンガリー・ポーランドなどに見られる民主主義の後退、EU 域内・EU 各国内の格差の拡大など、問題は重層的で、解決は容易ではない。このような複雑な状況は、欧州内の様々な問題、歪みが連動しあって生まれてしまったと言えるのだが、その背景を理解する上で最適なのが本書である。

本書は、冷戦終結後の拡大するヨーロッパ、EU の境界線をめぐる問題点とその解決方向を検討することを目的とし、第二次世界大戦後のヨーロッパの分断と統合、EU の拡大と東と南の境界線および国内の心理的境界線の双方に焦点を当て、周辺国との関係、EU 域内のゼノフォビアを中心に検討を行った意欲作である。ハンガリーとした中東欧を中心にヨーロッパはもちろん、ヨーロッパとアジアの地域統合や地域協力の比較研究など実に幅広い研究を行ってきた、筆者の羽場久美子氏が、冷戦終結後から、英国、ハンガリー、フランス、イタリア、米国での海外調査などで行ってきた研究の集大成の第二弾⁽¹⁾という位置付けとなっている。

⁽¹⁾ 第一弾は、1994 年の『統合ヨーロッパの民族問題』(講談社)、1998 年の『拡大するヨーロッパ—中欧の模索』(岩波書店)。2006 年の『ヨーロッパの東方拡大』(岩波書店)、2004 年および 2014 年 (重版) の『拡大ヨーロッパの挑戦』(中公新書)にまとめられている。

本書の構成と概要

本書は、4部、11章およびエビロークから成る。

第1部「ヨーロッパの分断と統合」では、問題を考えてゆくための背景として、冷戦の起源としてのヨーロッパ分断と西欧の統合、冷戦終焉後の東西欧州の再統合とEUの拡大、境界線の広がり、「新たな壁」の創設の問題を扱っている。

第1章「冷戦の起源と、ヨーロッパ分断」では、冷戦の始まりとヨーロッパが分断されていった経緯がどのようなものであったのかということを、特にハンガリーの事例をもとに解き明かしている。丹念な史料の検討に基づく分析により、ハンガリーの共産化がいかに単純ではなかったかが明確に示されている。この分析は、中東欧の共産化が十把一絡げに進んだわけではなく、各国がそれぞれの経緯を辿ったことも示唆しており、貴重な冷戦研究にもなっている。

第2章「冷戦の終焉」では、冷戦の終結過程で東西の壁の解放プロセス、東欧の民主化ドミノの動きを丁寧に分析し、その上で、ヨーロッパの分断が終焉し、熱狂の中で欧州の統合、EUの東への拡大が進んだ様子が描かれる。

第3章「新たな壁」では、冷戦終結後の1990年代に、西側から「新たな壁」が引かれていく過程が分析され、ヨーロッパ内の越えられない「壁」の存在と格差の現実が明らかにされる。

第2部「EUの統合と境界線の拡大」では、ヨーロッパの統合と東への拡大が進むプロセスが明らかにされ、それによって生まれた「新しいヨーロッパ」の理念と現実が示される。

第4章「新しいヨーロッパ」では、2004年以降に東に拡大していくEUを「新しいヨーロッパ」と捉え、それが目指すものを多面的に論じ、その上でEUがのちに新たな分断を内包してゆくことになる要素を明らかにしている。

第5章「どこまでがヨーロッパか」では、ヨーロッパの境界線に対する認識が西・東、さらにロシアでどのように異なっているかということを、特に西欧とロシアの「はざま」の地域にあたる中・東欧に注目して明らかにし、そのことが対立の根元にもなってゆくことを歴史的にも分析している。

第3部「ヨーロッパの分裂とナショナリズム」では、近年、急速に全世界で広がりつつあるナショナリズムとゼノフォビア（外国人嫌い）の波がヨーロッパをどのように襲っているのかを扱う。

第6章「拡大EUにおける民主主義とナショナリズム」では冷戦後のヨーロッパにおけるナショナリズムが、「民主化」の中でのリベラル・ナショナリズム（EU・NATO加盟）、ラディカル・ナショナリズム（民族地域紛争と戦争）、ゼノフォビック・ナショナリズムの3種から広がりを持って展開されてきたことを明らかにするとともに、冷戦終焉後の「民主化」の含意を問うている。

第7章「ユーロ危機の下での右翼の成長とゼノフォビア」では、経済問題などから東欧、ギリシャなどで広がっていったEUとの亀裂、フランスでの「シャルリー・エブド」事件などに見られるヨーロッパのゼノフォビア現象などの原因と問題点を分析する。

第8章「拡大EUにおける境界線とシティズンシップ」では、ヨーロッパがどのように

境界線の問題を克服して行けるのか検討するために、否定的な現実を受け止めつつ、その課題、限界、今後の展開について丁寧に論じている。

第4部「境界線をめぐる地域のナショナリズム」では、EUの境界線が外に拡大してゆくプロセスの中で生じるフリクション（対立と摩擦）とナショナリズムの問題を扱い、同時に、揺れ動く境界線上におけるアイデンティティの問題にも切り込む。

第9章「[中欧]アイデンティティの夢と現実、拡大EU・NATOのリアリティ」では「中欧」の多元的なアイデンティティの存在意義と、それが冷戦の影響で喪失・抑圧されるも、冷戦後にはヨーロッパの理念が回復されていく過程を描く。そしてその本来文化的に多様であったアイデンティティは、結果的にEU・NATOへの加盟により、抵抗と苦悩を経ながらも一元化されてゆくのであった。

続く第10章「ウクライナ」では、ヨーロッパの境界線とロシアの境界線のはざまにあるウクライナを扱い、ウクライナをめぐるロシアの動き、EUの対ウクライナ、対ロシア政策の協調とゆらぎを検討しつつ、ウクライナ自体が地域的に異なる文化・宗教・社会を構成しているために、一元的な国家統合が難しく、単なる「はざま」の国としてのみならず、一国家としても多くの困難な問題を抱えていることを明らかにした。

第11章「地域と境界からなるヨーロッパ」では、地域とそこに住む民衆から見たヨーロッパを扱い、特にヨーロッパを人々の「出会いの場」としての「コンタクト・ゾーン」と位置付け、多文化の共生を試みている現状を論じている。

最後のエピローグ「EUに未来はあるか」では、近年のEUの様々な問題を分析することにより、分裂と統合のヨーロッパの行方を展望している。

本書の意義とさらなる発展可能性

このように本書は、ハンガリーを中心とした中欧に中心的な視座を置きながら、ヨーロッパの様々な問題を歴史、文化、政治、経済、民族など多くの切り口から分析し、現状の諸課題を考える上での多くのヒントを提供しつつ、今後の展望や問題提起についても鋭い分析、論述を行っており、極めて学術的意義が高い研究であると考ええる。

本研究の意義と重要性は、第一に、拡大EUの境界線地域、および内なる境界線の状況を分析検討したこと、第二に、それが人の自由、中央、ウクライナなどそれぞれの地域における内と外の境界線、アイデンティティ、国際政治をめぐる問題を解明しようとしたことにある。

その中でも、現在の欧州の諸問題の最も根源的な元凶だと言える「包摂」と「排除」の問題に切り込み、その「多様性」を明らかにしたことは、今後のヨーロッパのより良い政策を考える上で極めて大きな意味を持つと考える。そのような研究をヨーロッパ内の分断が顕著になってくる以前から進めてきた著者の先見の明と問題意識の高さも高く評価されるべきであろう。

評者も欧米とロシアの「はざま」で苦しむコーカサスを中心とした旧ソ連地域を専門とする立場から、「はざま」の地域が抱える苦悩や矛盾については共感する点が多々あり、「はざま」の地域の研究としても本書は極めて先駆的であり、地域研究にも大きな貢献をしてゆくことは間違いないであろう。

一方、本研究のさらなる発展のために、より深めて論じてほしい点もいくつか指摘しておきたい。

まず、1993-95 年に中欧で「社会主義ノスタルジー」が蔓延したことが指摘されているが、それは一時的なものだったのだろうか。旧ソ連では未だに「ソ連ノスタルジー」がはびこっており、ロシアの例で考えると、社会不安や経済的な困難が高まった時期にノスタルジーは顕著に高まる傾向が見て取れる。ノスタルジーの展開とその社会・経済情勢との関係が長期スパンで明らかにされると、その現在の中欧での民主主義の後退との関連の有無なども検討でき、より深い研究に繋がられるのではないかと考えた。

第二に、コソヴォについてはコソヴォ空爆などの問題では扱われていたものの、コソヴォの紛争や独立問題における欧米の関与については扱われていなかった。だが、その点の分析があれば、それは本書でも重視していたヨーロッパの「ダブル・スタンダード」問題やヨーロッパの境界線の問題の両方に大きな示唆になると思われる。

コソヴォは多数の国家承認を受け、「主権国家」にかなり近い状況を維持してきたが、ヨーロッパの少なくない国々がコソヴォの独立を支援する一方、旧ソ連などの非承認国家に対しては国家承認をしてくれなかった。この背景にあるのがソ連やユーゴスラヴィア解体の際に適用が合意されていた、連邦内の共和国の国境を変更しない原則（ウティ・ボシデティス原則）である。しかし、欧米諸国がコソヴォを国家承認したことで、コソヴォ独立に反対するロシアなどは欧米のダブル・スタンダードを批判することとなった。

また、コソヴォ問題の解決策として、常に出てくる案が、コソヴォとセルビアの EU 同時加盟という考え方だ。セルビアがコソヴォ独立を容易に認めるとは思えないこと、またセルビアにロシアがテコ入れしていることもあり、この提案の実現性は近い将来には考えにくいだが、この問題はヨーロッパの境界線に大きく関わってくる問題でもあるため、本書のテーマを追求する上では重要な検討材料になるのではないと思われる。

第三に、2004 年という EU が中東欧に拡大した年に出された『拡大ヨーロッパの挑戦：アメリカに並ぶパワーとなるか』では、米国とヨーロッパの違いが、コソヴォ空爆やイラク戦争をめぐって詳細に打ち出されていたものの、今回の著書においては、EU と NATO の差異が明確に論じられていなかったことに若干の違和感を感じた。特に、この点はヨーロッパの境界線を考える際にも重要な含意を持つと考える。まず、EU と NATO の加盟国は重複しているケースが多いが、スウェーデンやフィンランドなど NATO に加盟していない EU 加盟国もあり、後者については間違いなくロシアの存在が影響している。また旧ソ連諸国の中で EU 加盟を目指している国はウクライナ、ジョージア、モルドヴァの 3 カ国だが、前二者が NATO 加盟も切望しているのに対し、モルドヴァは NATO 加盟を希望していない。モルドヴァの姿勢には、自国の「勢力圏」と考える旧ソ連諸国を自国の影響下に繋ぎとめようとするロシアへの配慮が見て取れる。

ロシアの EU と NATO に対する感情の温度差はかなり大きく、NATO 加盟だけはどんな手段を使っても阻止しようとしてきた。その結果が 2008 年のロシア・ジョージア戦争であり、2014 年のウクライナ危機でのロシアの暴挙であった。ロシアの欧州に対する姿勢が欧州の境界線に直接影響することを考えれば、ロシアの影響圏の概念も明らかにしつつ、NATO の問題は別途扱った方が良かったと思われる。加えて、近年、米国でドナルド・トランプ大統領が誕生し、トランプの政策がヨーロッパでも不信感を持たれている中、フラ

ンスのエマニュエル・マクロン大統領などから「欧州軍」創設の構想が発表され、ドイツなどからの支持も高まってきている。そうなれば、NATO と EU の乖離はさらに広がるとも思われるのである。

最後に、第三の点とも関わることなのだが、ヨーロッパの境界線は境界線の外側からの目線も必要となるのではないかと考える。EU に加盟したい国、具体的にはウクライナ、ジョージア、モルドヴァなどは自分たちをヨーロッパの一部だと考えようとしてきたが、ヨーロッパ側はそれらの国を「欧州の範囲外」に設定し、「欧州近隣諸国政策」や「東方パートナーシップ」などの政策をとってきた。EU にとって「欧州近隣諸国政策」や「東方パートナーシップ」は、EU の外側を安定させて EU を守る利己的な政策（「欧州近隣諸国政策」のモルドヴァ担当者に 2006 年に行ったインタビューによる）であったのに対し、EU に加盟したい国々にとっては、紛れもなく「EU 加盟のためのプロセス」と受け止められてきた。このような境界の内・外の温度差は、ヨーロッパの東だけで生じているのではなく、あらゆる境界で生じているものと思われる。それらの違いを明らかにしてゆくことも、EU 拡大の問題をよりリアルに浮かび上がらせてくれると考える。

むすびにかえて

以上、評者の専門からいくつかの論点を提起したが、これらの指摘は本書の学術的意義に影響するものではなく、むしろ本書が優れているからこそ、筆者のより深い分析を読みたいという強い衝動に駆られてしまったというのが正直なところだ。

そもそも本書のような大きな研究課題の検討は、共同研究でもなかなか行えないと思うのだが、それをここまで充実した分析で明らかにできるのは、長年、様々な、そしてかなり幅広い重要な研究テーマを世界の様々な拠点で解明してきた筆者の力量によるものであることは間違いない。本研究をベースにした筆者の今後の研究にも大きな期待をしている次第である。

本書はこれまでのヨーロッパの諸問題を理解するために最適の書であり、またこれからのヨーロッパ、そして世界を展望してゆくためにも重要な手引きとなってゆくだろう。ヨーロッパやヨーロッパ周辺地域の研究者はもとより、国際問題に関心をもつ方々にもぜひ読んでいただきたい一冊である。